いたずら 韋駄天の記

測作家 岡部耕大

44

映画1本に賭ける

もし、映画「長崎の鐘」がヒットしたら、次の映画は「東京ナインガールズ」を企画している。わたしは1本の映画がヒットしただけで、東京・成城に大邸宅を建てた人を知っている。賭けに勝ったのである。逆になにもかも失った人も知っている。

わたしは賭け事は嫌いである。パチンコも競馬もしない。マージャンもしなくなった。誘われるが、わざわざマージャンを打つためだけに新宿にまでも出掛ける時間がもったいない。負けたら自分がみっともない。気障にいえば、人生に賭けるので精いっぱいである。「東京ナインガールズ」の製作意図はこうである。

昭和20年8月15日、日本は戦争に敗れた。その敗戦をきっかけに日本女性の社会的地位や意識や風俗は大きく様変わりをした。「婦人参政権」を手にした女性は、戦前の男の聖域とされた分野にも激しく進出したのである。

スポーツは戦後の廃虚と混乱の中で「平和」や「女性解放」の象徴として、女性に広く活躍の場を与えたのである。しかし、それはショーとしての要素も強く、「女子プロ野球」も世間の好奇の目に晒された。貧困と飢えの時代。「女子プロ野球」に応募してくる女性は、深窓の令嬢から戦争で夫を亡くした人や闇の女と幅広く時代を象徴していた。

この物語は昭和23年の女子プロ野球「東京ナインガールズ」結成から、昭和26年の解散までを9人の女の悲喜劇と激動の時代の人間関係を骨太に軽快な描写で描くものである。

昭和二十五、六年ごろ、わたしは女子プロ野球を佐世保で見ている。海の見える高台のグラウンドであった。海には軍艦や帆船がいっぱい浮かんでいた。「いつの時代に、どこで生まれて、なにを見てどう育ったか」。これで作家のテーマは決まる。女子プロ野球の選手の太股は大きかった。ぱんぱんに張った短パンのユニホームである。相手は青年商工会議所の人ではなかったか。西鉄ライオンズによく似たユニホームであった。あれもなにかを賭けての試合だったのか。

わたしが関係した映画に菅原文太主演の「ダイナマイトどんどん」がある。いろいろなアイデアを出したが、手柄はすべて岡本喜八監督のものである。それでいい。それが映画である。

「東京ナインガールズ」はあの映画よりもはるかに面白いものにしたい。成立すればである。融資する人はいないものか。ヒットすれば儲かるのだが。

たかだか3億円か4億円である。映画人は、今日の昼飯代に事欠いた人でも、平気で4億、5億の話をする。撮影所は夢工場ともいう。あちらにもこちらにも、夢追い人がわんさと歩いている。

（松浦市出身）